

明日の風

「先日、小学校卒業五〇年目の人々が各地から集まりましてね、市内巡りの後、大野岳に登ったんです。久しぶりでした。あそこの眺望はそれは素晴らしいですよ。車で上まで登れますしね。お勧めですね」

お湯割りの焼酎のコップを手に松崎勝が田辺紀子に言った。

めっきり猫背になった勝の母の房江が、トウイモのスライスを添えた鯖の刺身の銘々皿を脇の食卓に置きながら紀子に言った。

「明日は、勝に案内してもらって、行きましょうか。私は地元にいながら登っていないし。きっと秋晴れじゃないかしら」

漁港に近い松崎家では忠雄と房江が、三十年ぶりという遠来の紀子とその息子洋一を居間の奥に置かれた古いが大きな長火鉢の前に招じていた。息子勝は、一昨年前まで鹿児島市内の私立の女子高校で数学の教師をしていたが、定年になって穎娃に戻った。今は町の中に建てた新宅で、受験生のための私塾を開いている。連休中の紀子母子の訪問に、何はおいてもと車で駆けつけて来たのだ。

紀子は、洋一の運転で穎娃の松崎家を三十年ぶりに訪問したのだった。紀子は前年の秋、夫正樹の七回忌を済ませていた。この六年間というもの紀子は、暇さえあれば静かに夫の好きな曲をかけて、在りし日を偲ぶばかりの内向きの日々を過ごしていた。

東京で大手の損保会社に勤務している洋一は、そんな母を気遣って、体育の日前後の三連休に帰省して、この松崎家訪問を提案したのだ。

「あの洋ちゃんが、こんなに立派になって、紀子さんも心強いだらうね。俺には虫取り網を片手に走り回っていた坊やしか思い浮かばなかった。これじゃ道で会っても分かんないよ」

忠雄が感慨深げに言った。五分刈りの白髪もすっかり少なくなり、日焼けした顔に深い皺を刻んでいた。前回会ったのは何時だったろうか。

「洋一の上の孫があの頃の洋一と同じ年頃なんですよ。尚子にも孫が二人です。本当にあっという間に年取ってしまいますね」

松ボックリを拾って正樹の傍らでおとなしく遊んでいた洋一の妹尚子も目に浮かび、紀子の眼差しは潤んできた。

二十年ほど前だったか、洋一が大学に合格したとき、安堵した紀子が、家族でゆっくり穎娃に行きたいと言い出した。しかし自立心の芽生えた洋一は、友達との予定が詰まっていると父母と一緒に出掛けるのを拒んだ。成長した洋一を忠雄たちに見せたい思いだった紀子は、結局断念したのだったが、その時の残念な思いは消えていなかった。

「僕は、会えばおじさんとすぐわかりますよ。皺は増えてるけど少しも変わっていない」

屈託なく応じている洋一の心の隅にも、かつて両親の思いを無碍にしたことへの小さな棘が刺さっていた。穎娃は両親にとって大切な場所であることを分かっていたからである。

房江と紀子は、ほんのりと酒気をおびた男三人の会話を同じ感慨をもって眺めていた。かつては洋一の席に、田代正樹が座っていたのだった。それは都会の有能なビジネスマンらしい瀟洒な今の洋一よりも若かく遅しかった。

半世紀近く前になる昭和三十六年、紀子は穎娃中学で英語の教師として転任して来た。初任地川内市からの転勤であった。丁度、すでに亡き紀子の母の従妹の房江が、穎娃中学に通勤可能な松崎家に嫁いでいたので、その離れを借りることになった。世話好きな叔母がその仲介をしてくれた。

松崎家は開通して間もない指宿線の西穎娃から二つ目の石垣駅近くにあった。石垣は古くは遣唐使が難破して漂着したという史跡もある歴史ある港町であり、かつては島津家の密貿易の拠点の一つだった。それは密かに許可されていたから、当時地元には相当な富の蓄えも出来ていたという。多くは壊されてしまったが、残された一部の古い屋敷の町並みには往時の面影がまだ残っていた。

松崎忠雄は働き盛りの漁師として、朝早くから海に出て、近海で獲れた魚を市場に出していた。朝まだ暗いうちに出港する何隻もの漁船のエンジンの音が、板戸の雨戸を通して紀子の枕もとにも届いた。

離れで紀子は基本的には自炊生活をする筈であったが、週一度は房江から夕飯に呼ばれるのが習慣のようになった。おかげで紀子は、晩酌を欠かさぬ忠雄から、出征当時のことや戦時中蒙古方面に出征し大変な苦勞をして復員したという話を何回も聞かされることになった。

忠雄の話によると、戦況もまだ日本軍が優勢と信じられていた昭和十八年、彼は召集令状を受けたという。二十三歳であった。

役場勤めだった忠雄の父は忠雄が中学四年のとき肺炎で急死したので、彼は小学校の代用教員を務めて、母一人子一人の生活を送っていた。出征を前にして、急遽縁談が持ち上がった。川内平佐にある母マツの実家では、日頃忠雄のことを気にかけていて、近くの農家の娘房江を嫁にと内々想定し、それとなく縁談を持ちかけていたのが幸いした。そのためにこの急場を実現することになったのだ。

それまで一度も顔も合わせたことの無かった二人は、忠雄の入隊の六日前に戸柱神社の境内で両方の身内だけのささやかに挙式した。

「この人はね、三々九度の杯を一度にパッと飲んで戻すから、三々三度だったのよ」

房江が身内の心安さから紀子に思い出話をした。

「いや、こいつは白く塗りたくっていてね、粉ふきイモのようだった」

忠雄も応じた。

出征当日は、近隣から大勢が集まり、日の丸の小旗を振りながらバス停まで見送られたという。戦闘帽をかぶり、赤い襷をかけた忠雄は勇ましく大声で挨拶し、挙手の礼をしてバスの人となった。鉄道はまだ敷かれていなかった。忠雄が、すぎるような眼差しでひたすら見つめていた房江に目を向けたのは、ゆっくりとバスが動き出してからであった。

「皆の目が僕を見ているだろう。キョロキョロできるか。そりゃあ分かっていたさ。あのときは俺も祈る気持ちだった」

房江の心細かったという話に忠雄は言ったものだった。

房江は新妻らしい生活もないまま、二十の若さで母になった。妊娠の知らせを受けた忠雄から、喜びの言葉とともに、男子だったら戦勝を祈願して勝(まさる)、女の子だったら武子と名付けるようにとの手紙が来た。

マツは実家の勧めで貰った嫁を粗略にはしなかった。戦時中の食料の乏し

い中を、房江はマツとともに心を込めて勝を育てた。

ともあれ昭和二十一年に忠雄が大変な紆余曲折を経て来たとはいえ、無事復員出来たことが、一家に何事にも変えがたい幸せとなった。

忠雄の復員からすでに十四年、房江をおおらかに助けて、戦後の松崎家を漁業で成り立つように支えてくれた働き者のマツもすでに亡かった。そしてようやく戦後の苦労話も気軽に話せる時代に入っていた。

「ここはね、カライモがどっさりあるし、イワシとカライモがあれば何とかなるという時代ね。母乳がどっさり出たから勝は無事育ったのよ」

紀子も子供の頃はお腹をすかせているのが常で、芋にお米をまぶしたようなご飯が弁当だったことを話した。

息子の勝は優等生で、指宿高校に通っていた。房江は、今英語の先生である紀子の下宿を引き受けておくことは、きっと勝の進学の助けになるだろうと思った。そして土曜日には紀子を夕食に招いて、口の重くなった勝に学校での出来事などを話すように仕向けるのだった。

転勤して二年目の夏休みに入ったばかりのある晴れた日の午後であった。紀子は日直だったので、一人担任の生徒の家庭訪問記録などの整理をしていた。三時近くだったろうか、用務員が職員室に顔をだした

「佐伯先生、ご来客ですよ」

紀子が昇降口に出てみると、前任の川内の中学を五年前に卒業した田代正樹と川井義男が立っていた。二人とも三年生のとき紀子が担任していた生徒だった。見違えるほど身長も伸び遅しくなっている。

「まあ、お久しぶりね。どうしてまたここまで来たの」

「八月十六日に中三のときの同級会を開くことになったんです。先生にお知らせするのに、いっそ行ってみようかと二人で来たんです」

正樹は懸命にその日は大勢集まる筈だと説明した。そして言い終わると額の汗を腰の手ぬぐいで拭いた。

「まあ、暑かったですでしょう。ちょっとお入りなさい」

驚いた紀子は二人を入口脇の教室に招じて一休みさせた。川内からここまでは西鹿児島駅の乗り換えがスムーズに行っても三時間は掛かるのだ。物珍しそうに辺りを見回しながら、二人は同級会の予定を書いた紙を差し出して説明した。彼らは前もって学校に佐伯先生の日直の日を確かめてやって来たのだと言った。

日程のノートをめくって、紀子はその日の空いていることを確認すると、「大丈夫よ。出席出来るわ。先生は日直でまだ仕事があるから、君たちはその辺を散歩していなさい。帰りの汽車の時刻も調べておきなさいね。五時に玄関で待っているわ」

紀子もここまで訪ねて来てくれた二人の気持がなんとも嬉しく、その後の二時間の経過がじれったく思えた。

見回り点検など規定の仕事をてきぱき終えて、やっと五時になった。紀子は玄関近くにボサッと立っている二人を見て、そそくさと靴を履いて出た。

「先生、ここは素晴らしいところですね。やっぱり来て見てよかった」

義男が言った。海辺まで歩いて来たと言った。正樹も言った。中学の校舎は高台にあって、眼前の街の先は海、左手に開聞岳が優美な曲線を描いて立っている。

紀子は

「本当ね。こんな風光明媚な学校は滅多にないでしょう。ほら、あれがラクダ山、後が大野岳よ」

と真夏の夕陽に輝く近隣の山々を指差して言った。

三人は、校庭脇の大きな梅檀の木に続く楠の並木道を歩いて校門の外に出た。陽は沈んだが、風が暑気をとどめて蒸し暑かった。

町に下りて紀子は二人を駅近くの蕎麦屋に連れて行って、冷やし中華ソバの大盛を二つ頼んだ。二人は無言で食べていた。

「今度は前もって知らせてから来なさいね。川内のように史跡は多くないけど、風景は抜群だから案内する所はいっぱいあるのよ」

帰りの汽車が六時五十分ということで、二人は近況報告などを話し合いながらゆっくり西穎娃駅に向かった。

義男は近所の建設会社に就職していたが、正樹は東京の私立大学三年生ということだった。汽車が出るのを見送ると、紀子は二人の帰宅は十一時近くになるだろうと思った。

同級会当日は川内川河口で花火大会があるから一泊するように勧められていたので、紀子は申し出のあった駅前のホテルを予約することにした。

会場は旅館の宴会場で八十人ほどが集まった。進学、就職などで故郷を出ていたお盆帰省組も約半数を占めて、若い男女の喧しいほど活気のある会であった。担任も転勤先からの二人を入れて五人が参加したが、一番人気は若い紀子で、生徒も教師も彼女の前に代わる代わる座った。

七時になった。開始の合図が打ち上げられ、花火が始まるというので、散会してそれぞれ外に出て河原に向かった。川内市ではまだ第三回目の花火大会だったが、すでに大人気の催しになっていた。近隣からも集まった大勢の見物客で、通りは大混雑であった。川内川の堤には観客が陣取って座っていた。彼らも空いているところにそれぞれ腰を下ろした。頭上を覆わんばかりに炸裂する色とりどりの花弁と、やや遅れて腹の底に響くような轟音が、初体験の紀子を酔わせた。宵のそよ風も心地よかった。

ふと紀子は二列ほど左手の後ろに座っている正樹の視線を感じた。振り返って確認したわけでもないのに何故か痛いほどである。そしてそれに胸騒ぎしている自分に気付いた。(彼は十九才の子供なのに何をバカな)

噴出すようなスターマインの水面に揺れる影を美しいと思いながら、立ち上がった紀子は、背伸びをするためのようにして、ゆっくり振り返った。正樹は膝を抱えて下を向いた。とたんに紀子は教師の顔に戻った。

一年近く経った。七月も下旬になり、明後日から夏休みという昼休みに正樹から電話があった。

「先生、川井とまた穎娃に行こうと話合っています。先生のご都合教えて下さい。午前中に伺うようにします」

紀子は八月三日の十時半に西穎娃のホームで待つと伝えた。自分でも不思議なほど心が浮き立った。職員室で斜め前に座っている数学の教師野崎の執拗な眼差しを鬱陶しく思っていた矢先だった。

家に帰るとノートと時刻表を開いて何処を案内しようか、何を食べようかなどと考えるのだった。

約束の三日の朝は、出勤日より早く五時に起き出した。というより眠れ

なかった。コンロに炭火をおこしてご飯を四合炊いた。5合炊きの釜だったが、何故かそれ以上は上手く炊けなかった。卵を三個割って卵焼きも焼いた。市販の山川漬けと昆布の佃煮を弁当箱の卵焼きの横に添えた。梅干と紫蘇を細かく刻み、砂糖を少しまぶしたものをご飯に混ぜて、海苔を巻いたおむすびを九個作り、経木で三個ずつ包んだ。昔、母が遠足のとき作ってくれた弁当を思い出しながら。

荷物は重くなったが、二人が持ってくれるだろう。水筒に冷やした麦茶を入れ、この日のために天文館で買った白、青、黄の縦縞のワンピースに着替えた。日焼け止めの薄化粧もして、つばの広い白い帽子を被った。

「まあ、先生今日はどちらにお出かけですか。そんなにおめかしして」

紀子が女学生のようないでたちで母屋の脇を通るのを見咎めて、房江が聞いた。

「前の学校の生徒たちが二人来るんです。この辺の名所を案内する約束していたものですから」

「それじゃあ帰りには連れていらっしやい。混ぜ寿司でもご馳走しますよ」

「本当ですか。それではお願いします」

荷物がなければスキップでもしたいようなはずんだ気分では紀子は石垣駅に向かった。

線路は単線なので西穎娃駅で上下が交差する。陽射しの強いホームには正樹が一人立っていた。

紀子は自分の乗っている列車に彼を手招きして乗り換えさせた。彼には戻りになる。

「川井は今日、現場からどうしても離れられないと言うんで僕一人です」

てれくさそうに正樹が言った。仕事をしているのだから仕方ないのだと紀子も思った。そして内心正樹と二人だけでもいいなと思い、そう思う自分にもてれながら、荷物を預けた。

「開聞の近くに行きましょう」

二人は開聞駅で山川行きのバスに乗り換えた。バスは開聞岳の裾野に沿って巡るように畑作地帯に行く。そして薩摩半島最南端の長崎鼻で降りた。二人は土産物の並ぶ下りの細道を灯台に向かった。灯台に下りる小道は岩道で、正樹はよろけそうになる紀子に手を延べようと思ったが、結局踏み止まった。

遠く望む九州最南端の海は果てしなく広がって、白い波頭をきらめかせた波が、次々とゆるやかに寄せていた。二人は、足元に碎ける波音を耳に、しばらく無言で立ちつくしていたが、やがて灯台を背に戻り、浜辺に出た。

眼前に夏の陽を正面から浴びて開聞岳がすっと立っていた。その裾を白波が優しく洗う。姿は優美だが、力強く迫って来るように思える。正樹はその景色を前に暫らく動かなかった。

木陰を見つけて正樹を手招きし腰を下ろすと、紀子はお弁当を開いた。正樹は平気な顔で川井の分も平らげた。

紀子は教師らしく、専門課程に入った筈の大学の勉強の様子など質問した。

四年前安保条約改定は調印されたものの学生の政治活動が活発な頃で、その辺りの東京の話も聞いてみたかった。しかし正樹は政治には意外と冷めた目で見ているようであった。父親の経営する電気工事会社を継ぐことで、生活費や就職の心配がないことも政治に無関心でいられるのかもしれないと紀子は思った。

「彼女は出来ないの」

「文学部には女性が四分の一くらいいますが、僕たちの政経学部は殆どいませんし、キャンパスで見かける女子学生って、何か物欲しげに見えて興味が湧かないんです。さもなければ女子ばかりで群れて男性をよせつけない雰囲気ですしね」

紀子は正樹がいつか大人の目で女を見ていると感じた。六年間に身長も伸びているし、肩幅も広く逞しい。もともと無口だったが、今時の都会の若者に見られる軽薄さとは無縁のようだと、遠くを見詰めて言葉を選んでいる彼を眺めた。

「先生には僕はいつまでも子供でしょうか」

「いいえ、今ね、随分大人になったなあって思ったところよ」

紀子は笑って言った。空の手提げをたたんでハンドバッグに入れ、水筒は彼に預けて、しばらく連れ立って浜辺を散策した。

正樹の豊かな漆黒の髪が風に揺れて、日焼けした額にハラハラとかかり、それをかき上げるしぐさもワイシャツの眩しい白さとともに、紀子の目に焼きついた。清潔な若さが匂い立つようだと思った。

正樹もほっそりした紀子のワンピース姿と軽やかな足取りに、教師というよりは可憐な少女のように見えた。そして背景の景色とともに絵のようだと思って眺めた。

夕飯を作っているという房江の言葉を思い出して、紀子は一旦山川に出て、汽車に乗り、石垣で下車した。浜辺の方に下りた街並みの中に松崎の家があるが、それを通り過ぎて戸柱神社まで行った。

神社は浜辺から少し高台の草叢の中にあつた。海辺に出てみると、右手は漁港で、小さな港には漁船が十隻あまり集められたように隣り合って揺れていた。夕日とその先の小さな岬の影に隠れ、左手を見れば、遠く柔らかな残照を浴びて、開聞岳が見えた。それは美しく淡い藤色で全く同じ山とは思えない優しい夢の色で東の海に浮かんでいた。眼下の波もゆるやかに岸に寄せている。

「きれいだなあ」

正樹は感嘆した。紀子は正樹にこれを見せたかったのだと言った。

「ねえ、先生。これは優しいピアノ曲ですよ。軽やかなメロデーが聞こえてくるような気がする」

紀子には音楽は身近なものはなかったので、正樹の表現に驚いて言った。

「えっ。じゃ長崎鼻の開聞はどうだったの」

「どうって、何見ても音楽が聞こえて来るってものではないですよ。ま、言ってみれば華麗な協奏曲かな。そうであれば交響曲だった」

紀子はまだラジオすら持っていなかった。

松崎の家に戻ると、もう散らし寿司が出来上がっていた。

「一人は仕事の都合で来られないということで、お客さんはこの田代正樹さんだけです。でもこの体ですからね。二人前は食べてしまうでしょうね」

卓袱台の前に窮屈そうに正座した正樹は本当に美味しそうに食べた。遅れて来た勝も負けじと旺盛な食欲を見せた。一浪してこの春鹿児島大学に入学したばかりの勝は、二歳年上の正樹をそれとなく盗み見ていた。

焼酎のコップを片手に、忠雄は正樹の生い立ちなど質問した。汽車の時間を気にする正樹だったが、忠雄が自分の復員の時や枕崎台風後のさんざんな

苦勞話などを挟むので、自然と打ち解けて、四歳の時に満州から引き揚げて来た事、母の死、父の家業設立の苦勞などを手短かに話した。紀子はそんな正樹の話の話を初めて聞いたのだった。

前回と同じ列車に乗るにはあまり時間がなかった。紀子は足早に石垣駅まで送った。南国の夕暮れは遅い。まだ十分明るかった。

「先生、今日は本当に楽しかったです。有難うございました」

「田代君、今日の一日のこと音楽だったらどんな曲になるの」

紀子が聞いた。

「いや僕も音楽に詳しい訳じゃないですよ。でも何かが鳴っている。またお知らせしますから」

遠ざかって行く列車を複雑な思いで紀子は見送った。胸の奥にキュンとした痛みが残った。それが何なのか、紀子にはかすかな予感があった

家では忠雄と房江が

「あの子は紀子さんに夢中じゃないのかな」

「紀子さんには生徒さんでしょうけど、連れ立って来るなんて今までにないことね」

などと話し合っていた。

九月に入った。東京に戻った正樹から葉書が届いた。

「今日、コーヒー屋で何気なく耳にした音楽が胸に沁みました。聞くとフォーレのピアノ曲ということです。一緒に聞きたいと思いました」

紀子は、地味な小学校教師の家庭で育ち、時代も戦時下で、軍歌と童謡しか知らなかった。戦後、映画「未完成交響曲」を見た後で未完成を聞いてもそれが未完成だと分からない。自分には音楽というものに才能がないのだと思っていた。

それでも正樹と話を合わせようとトランジスターラジオを買った。そして『音楽の泉』などの音楽番組にチャンネルを合わせるようになった。紀子も聞いた音楽に対する感想を正直に書いたことがあった。正樹からそれには返事がなかった。それは多分見当はずれなことなのかもしれないと、恥ずかしさと後悔にしばらく苛まれた。年賀状にはただ「今年は卒業です。いろいろ考えましたが、きっと川内に帰ります。」とあっただけだった。

翌年の昭和三十八年は、東京オリンピックの前年ということで、東京は大改造のさなかであった。好景気が人材を求めていた。正樹は大学を卒業したが、友人の殆どが就職していくのを見て、予定どおり家業を継ぐことに多少の逡巡があるようでもあった。彼は家業の電気工事や機器について何の知識は持っていなかった。父は京都で業界の講習を二ヶ月受けることを強要した。正樹は自分の好きな人との結婚を認めるということを条件にようやく受講を承諾した。さもなくば彼は東京で就職すると言い張ったのだった。

二ヶ月の研修期間が過ぎて家に帰った正樹は、父に言った。

「実は僕はまだ相手の女性に結婚の申し込みもしていないし、許可ももらっていないんです」

「なんだ、お前の片思いか」

大分白髪が目立つようになった父幸造は目尻に深い皺をよせて笑って言った。正樹が高校に入った頃から父子の会話は途絶えがちだったから、幸造は上機嫌だった。

「先ず相手の承認が先だな。話はそれからだよ」

苦勞して会社を創設した父は、相手の女性の出身が鹿児島であるということ以外は何も詮索しなかった。

六月の梅雨の小雨のある日、紀子は彼女の郵便受けの中に正樹からの白い封書を見つけた。少し濡れてインクが滲んでいた。卒業後、父を手伝うことは以前連絡があったが、その後はどうしているのか紀子も気がかりになっていたところだった。正樹から手紙をもらったのは初めてだったので、もどかしい思いを抑えて部屋で丁寧に鋏で封を開いた。

内容はまず連絡もせず過ごしたことを詫び、帰郷間もなく業界の講習会を受けに京都に行っていたこと、家業を継ぐ準備が整ったとなどの報告があった。そしてその後

「僕には大事な相談があります。ゆっくりお話したいのです。第三日曜日の十七日空いているようでしたら、西鹿児島駅の待合室で十時に待っていますので来てほしいと思います。ご都合お知らせ下さい。電話番号は次の通りです」

とあった。

紀子は、頬に血が上ってくるのを感じた。特に予定もなかった。予定があったとしても出かけることに決めただろう。学校からの電話は憚られたし公衆電話は遠い。それに電話には確実に正樹が出るか分からないと思って、承諾の旨の手紙を丁寧に書いた。

その日は朝から梅雨の中休みといえる上天気になった。

紀子は白地に紺の水玉模様の袖山の膨らんだブラウスに紺のフレアスカート。白いサンダルを履くと、勝の目を気にして急いで外に出た。

五月雨の、晴れ間嬉しく、
野に立てば、野は輝きて
白雲を通す日かげに
早や夏の暑さを覚ぼゆ

紀子はいつか小学唱歌を口ずさんだ。そしてガラス戸に写る自分の姿をチラチラと確かめながら歩いていた。

西鹿児島駅で正樹に会ったものの、正樹も市内には不案内だった。駅前をうろうろした後、正樹が

「汽車の中の方が話し易いかももしれない。日豊線に乗ってみませんか」と言った。紀子も、街中を歩き回るのも暑いし、食堂も落ち着かない。それが名案かもしれないと思って同意した。

正樹が都城までの切符を二枚と駅弁二つ買って来た。始発の列車がホームに入っていたので、乗客もまばらな先頭の列車の中ほどの海辺側に向き合って席を取った。紀子がお茶を二つ買って窓際に置いた。出発までまだ十五分あったが、正樹は話を切り出さなかった。動き出す前にお弁当を食べるのも間の悪いものだが、止まっている車中では話を切り出すのもしにくいものようであった。

何度も出発の大きな声のアナウンスがあった後、ガタンと揺れて汽車が動き出した。汽車は、西鹿児島駅から鹿児島駅を過ぎ、間もなく桜島の雄姿を浮かべる錦江湾縁を走った。太陽をやや背にした山容は幅広く堂々と車窓に対峙していた。錦江湾は湖のように白く輝く小波を浮かべていた。二人は方角によって姿が変わって見える桜島に見入った。やがて桜島も後方に姿を消し、差し込む日光が暑いのでブラインドを下ろした。

「お話ってなあに」

しびれを切らして紀子が聞いた。観念した正樹が身を乗り出して紀子を見つめ、しっかりした口調で言った。

「先生、僕の嫁さんになって下さい」

紀子は予感していたこともあって、微笑んで言った。

「ねえ、先生は本当に嬉しいと思うけど、一寸考えてみて。私は今年三十才の大台に乗るのよ。あなたみたいに優秀でハンサムならいくらでも若い娘がいるじゃないの。あと十年もしたら、なんでこんなおばあさんを嫁にしたんだろうと後悔すること請け合いですよ」

若く好ましい正樹とこうした時間を持てること自体が、夢のような幸せなひとときなのだと紀子は思っていた。

「先生、僕がそんないい加減な気持ちで言っていると思いますか。僕は八年前の最初の授業のときから決めていたんです。先生には分からないかもしれないけれど、僕は運命だと信じて来ました」

正樹の大げさな言葉に、紀子は驚いて言葉が詰まった。正樹の視線をいつも感じていたと思うし、その存在を好ましくは思っていたものの、運命の相手というような捕らえ方はしていなかった。口籠りながら紀子が言った。

「でもお家の方はなんて思うでしょう。許してくれるかしら」

「僕が鹿児島に帰る条件はそのことなんだから、そんなこと問題はない筈です。父に先方の承諾が第一だといわれました」

正樹は一家が引き揚げてきたとき、衰弱した母を亡くしたことを話した。

「最初の授業のとき、アポストロフィーのことを上カンマって言って、先生がそれでも分かるって言って下さったときの笑った目に母を見たんです。母の優しい目だった。先生は覚えていますか。僕はそれから、ずっと先生ばかり見詰めてきたんです」

「でもお母さんと結婚相手とでは違うんじゃないかしら」

「それは最初は母と重なっていたのは事実です。でもいつしか先生こそが僕の求めている女性だと気づいたんです。東京に出てしばらくしてそれが分かりました。この気持ちが本物かどうか三年間ずっと問い続けてきました」

紀子も、戦時中母を結核で亡くしていた。終戦の二年後、父は再婚した。継母も人は良く、紀子に気を使ってくれてはいるのだが、やはり心からは馴染めず、実家とは疎遠になりがちであった。精一杯気を張ってはいるものの、内心は常に孤独感と闘っている自分を思った。正樹の言うようにこれが運命的な出会いなのだろうか。

頼娃に来てからも同僚の教師に紀子の気を引くよう努める者も何人がいた。しかし紀子には何か物足りないか、生理的に受け入れられないと思う人ばかりだった。しかしいずれはこんなものかと諦めて彼らの一人と結婚するのだろうかとも思っていたのだった。

「お腹がすいたなあ」

言うべきことは一生懸命言った。先生は分かってくれる、聞き入れてくれるという自信が正樹にはあった。何故ってこれは運命なのだから。

正樹は、弁当の紐を解き始めた。紀子も下を向いたまま開き、ゆっくりお弁当を食べた。正樹の気持は嬉しく心が躍った。しかし彼女の中には、正樹を異性と認識するよりは、生徒としての認識をせねばという義務感のような硬いものがまだ強かった。(私は世間体に捉われ過ぎている。もっと素直にな

るべきだ)紀子は自分に言い聞かせた。

汽車は何度も停車しては、乗客の出入りがあったのだが、二人とも全く目に入っていなかった。

いつか二時間近く過ぎて都城に着いた。改札口に出るでもなく、ホームのベンチで下りの列車を待った。

二十分ほどで下り列車が入った。八分通り乗客が座っていたが、二人は並んで席を取ることが出来た。まだ紀子は返事が出来ないでいた。

お互いの体温を感じながら、二人はしばらくの間窓外に広がるタバコ煙を眺めていた。耳を澄ませばおのれの鼓動に相手の鼓動も重なるのではないかと紀子は思った。ついに意を決して紀子が言った。

「もしあなたのお父様が、三十才の女でもいいとおっしゃったらあなたのお嫁さんになるわ。私はあなたを信じるけれど、お父様がノーとおっしゃったら諦めましょうね」

「父は大丈夫だとさっき言ったじゃないですか。先ず僕が先生のご両親にお許しを得なければなりません。それから僕の父に会ってください。日取りを決めましょう」

とたんに正樹は元気が出て来たようだった。

紀子も胸がすっとして、気が楽になった。私はなんと幸せな運命なのだろう。そう思ったとたん疲れがどっと出て来た。彼女は無言で頭を正樹の肩に預けてしばらく眠った。

翌週、二人は紀子の実家に行った。紀子の父の佐伯孝雄は伊集院の小学校の教頭になっていた。彼は相手が七才も年下ということに驚きはしたが、真面目そうな好青年であるし、その真剣さに打たれた。実は紀子がこのまま行かず後家になることを心配していたところだったから、否も応もなかった。継母の敏子もほっとした様子だった。

二人はその足で残る正樹の父に会うため伊集院から川内に向かった。

母のいない家庭のこと、父の田代幸造は、常連の和風料亭に夕食の用意をさせていた。

二階の奥の間に案内されると、正樹の父の幸造が床の間を背にゆったりと待っていた。

「やあ、よく来たね。話は正樹からきいているよ」

幸造は、頭を下げた紀子の細いうなじに目をやりながら声をかけた。紀子は紋切り型の挨拶を堅くなって言った。しかしいつしか教師の落ち着きを取り戻して、柔らかに冷静に対応しているのだった。

時間をかけた食事が済んで、紀子は化粧室に入った。父と子は密やかな会話を交わしていたが、戻った紀子を振り返った二人の表情は明るかった。帰りの道すがら正樹は言った。

「お前には勿体ない人だと父に言われましたよ」

紀子は(ああこれで私の運命は決まった)と思った。とたんに一気に緊張が解けてへたへたと座り込みそうになった。そんな紀子を駅まで正樹が力強く支えて歩いた。結局正樹は西鹿兒島に出て、紀子を枕崎線に乗せるまで付き添ったのだった。

挙式は翌年の春と決まった。学年半ばで辞任することを紀子が拒んだからであった。

結果、正樹は運転免許を取り、空色のブルーバードを買った。それから八ヵ月の間、月二回ほどは頼娃に車で来るようになった。加世田、知覧を経て、一面の茶畑や甘藷畑を縫って走って来た。そして紀子と、ラジオやカセットテープでの音楽を聞きながら南薩をドライブして廻った。音痴と自認していた紀子も、正樹の感じる音の世界を自然と理解出来るようになっていた。四五時間のドライブを楽しみむと、正樹は夕陽を背に几帳面に帰るのだった。

房江の強い勧めで汽車で来た時も何回かはあった。房江の海の幸の手料理に腕を振るい、忠雄は正樹との一杯を楽しみにしていた。しかし正樹は羽目をはずすことなく帰ったのだった。

残暑も嘘のように急速に冷め、虫の音もか細くなったある日、
「今日は笠沙に行ってみよう」

と正樹が言った。真夏の暑い日に坊津までは行っていた。地図には細かい凹凸があるが赤い国道が岬を巡って加世田に通じている。いつものように紀子は手作りの弁当と水筒を積んで枕崎方面に出発した。

坊津を過ぎると道は極端に悪くなった。眺めは絶景だし、ポツンとバス停の印も立っている所もあった。しかしバスが来たらどうやってすれ違うのか心細いような道になった。もう音楽どころではなかった。正樹は緊張して曲がりくねった山道を進んだ。幸い対向車は一台もなく、いつか東の方に向いたのか眩しさがとれた。

小さな岬の突端だろうか、眼前に海が広がり、椰子が四五本植えられているところに出た。駐車できるスペースがあったので正樹は車を止め外に出た。植え込みの先は断崖で、下の岩にしぶきが白く散っていた。

「まあ、きれいな色」

紀子が歓声を上げた。眼前は果てしなく広がる東シナ海で、穏やかに明るい。錦江湾のくすんだ青とは透明度が違う。そして眼下の一画はサンゴ礁の海のような緑がかかった碧であった。川内の西方海岸から臨む東シナ海も美しいが、この隔絶した岬から見下ろす澄んだ碧の海は見たことがなかった。人気のないこの岬の海は何の汚染物も流れ込まないのだろう。

正樹も感動してしばらく無言だった。ふと見ると脇に歌碑が立っている。

神つ代の笠狭の碕にわが足を
ひとたびとどめ心和ぎなむ

斉藤茂吉の歌だった。長崎医大に勤務していた茂吉は、歌人としてこんな人里離れた草深い岬まで訪れたのかと二人は話し合った。

「今日のお弁当はここがいいわ」

紀子は道からの死角になる車の陰にござを広げ、弁当の入った籠を下ろした。さわやかな秋風が吹き抜けた。ゆっくり食事を取ったがその間車は一台も通らなかった。

食後、紙くずなどを始末して紀子は正樹と並んで座り水筒の蓋でお茶を分け合って飲んだ。助手席に座っていても緊張した運転に疲れを覚えた紀子は、半身を彼にもたれかけた。この前の正樹はランニング姿だった。紀子は、日焼けした正樹の首筋や肩のなめらかな若い肌に頬を押し当ててみたい誘惑を辛うじて耐えたのだった。今日はクリーム色のポロシャツで、それもよく似

合うと紀子は思った。彼女は彼の厚い胸板に顔を押し当てた。正樹の右手が紀子の背を支え抱えた。ややあって正樹はゆっくりと紀子の体を起し倒した。正樹は目を閉じた紀子に顔を寄せると、初めて唇を重ねた。

松籟がヴィバルディのマンドリン協奏曲を奏でていた。

翌春になって、川内市内のホテルで、明るい結婚式が挙げられた。両家の親戚に田代電気の社員や紀子の教師仲間、同級生で教え子でもある友人などの大勢が賑やかに祝ってくれた。川内では二人の年齢差がしばらく話題になった。

結婚後も、子供たちの小さな間は、季節ごとに石垣を訪れていた。しかし高度成長期のさ中に父幸造が亡くなると、田代電気の猛烈に忙しい仕事が正樹の肩にのしかかった。旅行するとしても個人ではなく、社員旅行が中心になって行った。

正樹と紀子はわき目もふらずに働いく日々が続いた。一日が終わり、子供たちが寝付いたあと、ベッドで寄り添ってレコードを聞くそのひとときが二人の安らぎだった。

正樹はラジオで気に入った曲があるとよくそのレコードを買って来た。難しい批評や作曲家などには関係なく、自分の心に響く曲を選んでいたので、ある意味ではとりとめはなかった。疲れた日々は心に和むピアノ曲やヴァイオリン曲などの小品を好んで聴いた。特に若い日のモーツァルトの歌うような旋律などは、何の抵抗もなく心が和み、幸せをしみじみと感じさせてくれるのだった。

休日の午後は二時間ほどかけてオーケストラの交響曲などを丹念に聞いた。紀子は正樹の解説を満足気に目を閉じて聞くのだった。

二人には、洋一と尚子の二人の子宝に恵まれた。洋一は東京の大学を卒業後、大手の損保会社に勤め職場結婚をしていた。転勤が多く、マンション住まいで単身赴任も多い。定年までは鹿児島には戻って来ないだろう。

洋一と六才年下の尚子は鹿児島市の女子短大を卒業後、父の事務を手伝っていたが、間もなく若い社員の柏木隆一と結婚した。

平成六年、バブル経済がはじけた。それまでうなぎ上りだった不動産や株価が下落しはじめた。それでも何とか持ちこたえてきたかに見えた経済も、平成九年、消費税が2パーセントアップの5パーセントになり、日本全体の景気に急速に陥った。新規の大きな仕事が徐々に減って、先行きに不安をもたらしていた。後に失われた十年と言われるようになった時代がそこから始まった。

田代電気は正樹は働き盛りであり、会社を多少規模を縮小したものの、尚子と柏木がしっかり支えていた。何よりも不景気を吹き飛ばす明るいことが続いた。正樹と紀子は内孫、外孫それぞれ二人ずつのおじいちゃん、おばあちゃんになったのだ。

このところ時間的に余裕が出たことが、紀子に外出の機会をもたらした。昔とは格段進んだ発音の英会話教室に通ったり、短歌の集いに出席するようになった。精神的なゆとりが生まれ、この平凡な幸せがずっと続くのだと疑うこともなかった。

しかし好事魔多しというべきか、一寸先は闇というのか、正樹は五十七才で肺癌のため亡くなった。正確には悪性胸膜中皮腫であった。あまりにも突然に降って湧いた不幸だった。いや降って湧いたというのは、事実ではなかった。その病は正樹の体をじわじわと三十年も蝕んで来たのだった。

最初は、正樹が息切れをするようになったことから始まった。顔色も悪くなり、呼吸もゼイゼイいうようになった。胸も痛み始めた。正樹は病院にいて、X線の検査を受けた。肺癌という結果は紀子のみ伝えられた。

今思えば、四十年前の高度成長期から三十年間、あちこちで建てられた体育館やホールの配線のために、屋根裏を這いずり回る日々だったから、アスベストの飛沫を吸い続けていたのだと思われる。

徐々に呼吸困難になり苦しむ正樹を、紀子はこれ以上ないほど献身的に看病した。自分の命を縮めてもと神に祈った。そして正樹の好きなラフマニノフのピアノ協奏曲2番やヴィバルディの四季などを繰り返し掛けた。酸素マスクを付け、眉をしかめて目をつむっている正樹は曲が始まると表情が和らぐのだった。正樹が逝ったのは平成十年の秋であった。発病後1年足らずのことであった。

紀子は混乱の中、覚悟してよく夫の死後の引継ぎを手際よく準備した。葬儀は葬祭場で行い、大勢の見送りを受けた。正樹を惜しむ声はいつ果てるともなく紀子に降り注いだ。

母を気遣って、洋一は妻や子を返したあともしばらく川内にいた。店は名目は紀子が社長ということで再開したが、いずれは尚子の夫柏木が継ぐだろう。一応生活のリズムが戻ったことで、洋一が帰郷すると、家の中に虚しさが漂った。尚子一家と同居しようと紀子は思った。

一人静かに振り返って、紀子はまだ頼娃にいた時期が一番懐かしく思えた。夕陽を眺めながら聞いたサラ・サーテのツゴイネルワイゼン、小波の寄せる浜辺を思わせるアルベニスのピアノ曲イベリアなどが頭の中で鳴り出すのだ。紀子はそれらを探し出してプレーヤーにかけては、一人追憶に耽る時間が多い七年間だった。

が、今はその頼娃にいる。

房江が湯気も匂いたつ伊勢えびの澄まし汁の椀を配った。

「海老も解禁になったばかりでね。もう少ししたら締まって美味しくなるのだけれど」

「まあ、久しぶり。これはここだけのご馳走ね」

食事が済むと忠雄は早々と寝室に戻り、勝も洋一も心地よげに酔っていた。紀子と房江は近況をこまごまと話しあった。話題は孫に集中した。勝にも二人の孫がいるということだった。

翌日も穏やかに晴れた。勝の軽自動車の先導で、洋一の運転する柏木のクラウンが房江と紀子を乗せて後から続いた。国道226号線を頼娃の町に向かって走る。

大野岳は穎娃町の東北にフワッと座っている標高446メートルの優しい山である。かつて紀子はパンの甘食のようだと思っていた。近頃はその甘食も見かけなくなると紀子はふと思った。下から見ると頂上に白いテレビ塔が何本か見えた。

穎娃町役場の反対に折れて、大野岳を後ろから巡るように頂上に登る道が整備されていた。とぐるのような坂道を行くと難なく頂上近くの大野神社の駐車場に着いた。

大野神社は、権現様を祀ってあるということで、古い石の鳥居や狛犬があった。社殿は比較的到新しかった。

駐車場にある案内板を見ると、頂上に展望台がある。一同は、脇の歩道を登った。房江は勝に手を引かれて、休み休みゆっくり登った。穎娃町に住んでいても、今まで登る機会がなかった。

辿り着いた展望台は、赤錆びた鉄骨造りだが、手摺りを頼りに階段を登ると眼前に絶景が広がった。南方の眼下に穎娃の町が連なり、右手遠くには枕崎が見える。左手には開聞の優美な姿が全身秋の日を浴びていた。振り返れば緑の丘の間に青い水を湛えた池田湖があった。左方後方は見事な茶畑が広がっている。紀子も房江も歓声を上げた。

「ああ、来てよかった。こんな素晴らしい景色は生まれて初めてだわ。おじいちゃんも昔登ったなどといってないで、頑張ってきてよかったのにな」

房江がもう思い残すことはないと言った調子で言った。

池田湖の先の喜入峠とおぼしき山並みの後に、岩石の色をしたスライスされたような頂きがあった。

「あの色からするときっと桜島のとっぺんかもしれない。まるで反対の位置に思えるけれど、帰ってから地図で確認しよう」

と紀子は思った。

ふと紀子は正樹ならどんな曲が相応しいというだろうかと思った。きっとメンデルスゾーンの「イタリア」ではないかと思った。まだ聴いたことはないが、「ナポリを見て死ね」と言ったゲーテの言葉から想像して、この風景のような明るい広がりのある曲だろうと想像した。そしてハッと目から鱗が落ちたように思った。

「私は正樹との思い出の曲を聴いてばかりいたけれど、これからは新しい曲を楽しむことも考えよう。そうだ。見知らぬ国にも旅立ってみよう。少し動いただけでも、こんなにも素敵な視界が広がるんだもの。そしてそれを正樹と誰の曲がふさわしいか語り合うことにしよう。きっと喜んで答えてくれる筈だわ」

初秋の爽やかな風が吹きぬけた。紀子の胸の中もいつになく躍っていた。風は紀子の襟をはたはた揺らせた。彼女をまだ見知らぬ明日へと誘うかのように。